



TITLE:

日本一のクラゲ天国田辺湾(43) ギンカクラゲ2

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. 日本一のクラゲ天国田辺湾(43) ギンカクラゲ2. 紀伊民報 2011

ISSUE DATE:

2011-11-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180176>

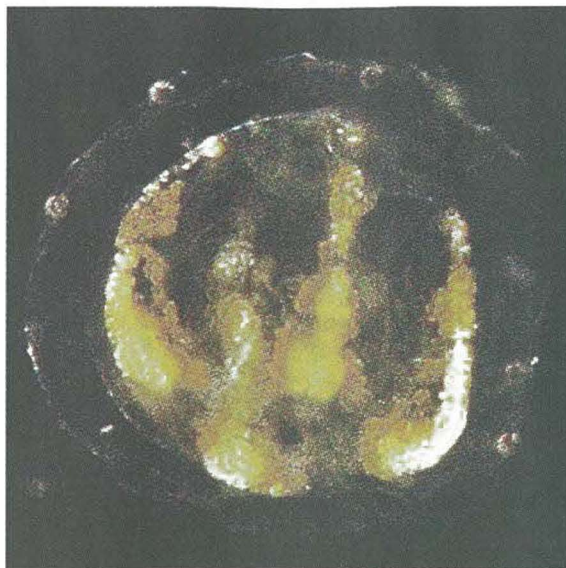
RIGHT:

© 紀伊民報社

紀 伊 民 報

2011年(平成23年)11月23日 水曜日 第20752号 (10)

# ギンカクラゲ2

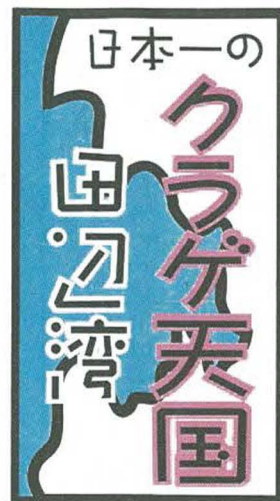


△  
自然界でほとんど採集  
されることがないギン  
カクラゲのクラゲ

写真の1ミにも満たない小さなクラゲを見て種類を判定できる人はそうはいない。本来、海辺で見つかることのない「ギンカクラゲのクラゲ」なのだ。はるか沖合の黒潮がとつとつと流れる外洋で、細

久保田 信

43



かい網目のネットをひくと、ひよっとしたら採れることがあるかもしれない。

ここで皆さんは「クラゲのクラゲ」という言葉で首をかしげるだろう。実は、まれに海岸などに流れ着く青色の触手を持った大きく立派なのは、群体となって浮かぶポリプなのだ。

このれっきとしたギンカクラゲのクラゲは、少々変わった姿だ。触手はまったくない。口もあるのかないのか分からないぐらいに退化している。きつと獲物を食べないだろう。

4本の放射水管の黄緑色の粒々は、藻の固まりである。植物が共

生しているのだ。普通のクラゲと違って、肉食ではなく、藻から太陽の光を使つての光合成でつくられた栄養をもらっている。外洋で皆さんと太陽を浴びて、このクラゲは大きくなる。成熟した個体は、この未成熟のクラゲよりもなおさら発見しづらい。多くは食物連鎖で食われてしまうからだ。

では、このクラゲはどうやって得たのだろう。短期間のポリプ群体の飼育によるものである。今年10月23、24の両日に合わせて1285個体ものポリプ群体が京都大学瀬戸臨海実験所の北浜に流れ着いた。これらの一部を水槽に収容。流水飼育して、それから遊離した本当のクラゲをプランクトンネットで集めたのである。

その数は莫大(ばくだい)で、1群体から数千ものクラゲが放たれた。しかし、自然の海はあまりに広大で、この程度では野外からは採れないのである。

(京都大学准教授)